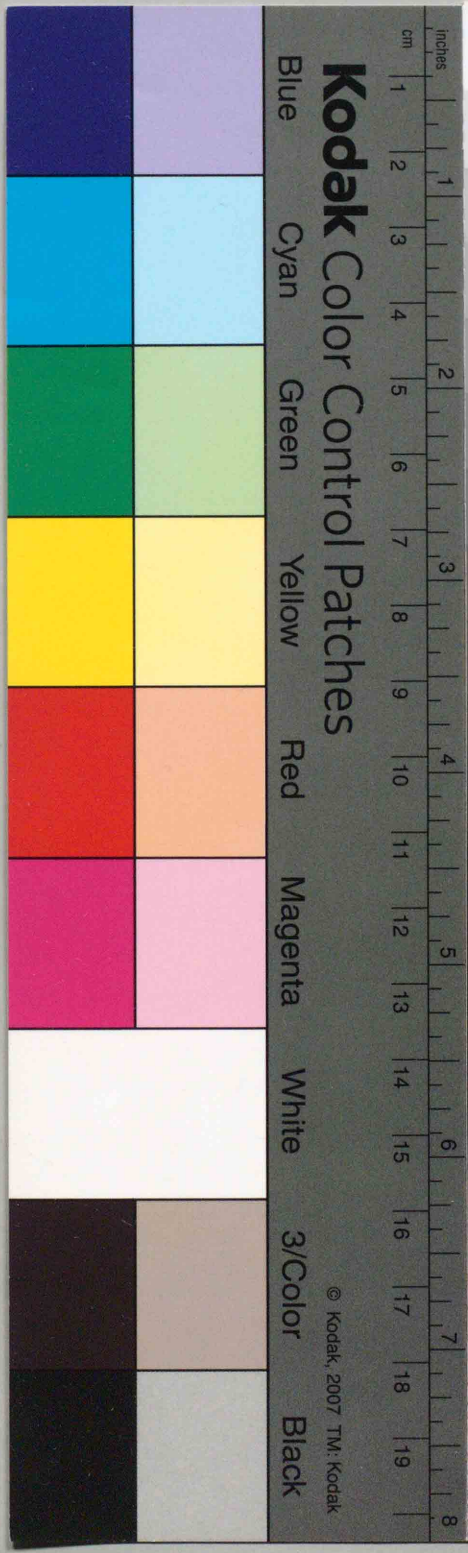
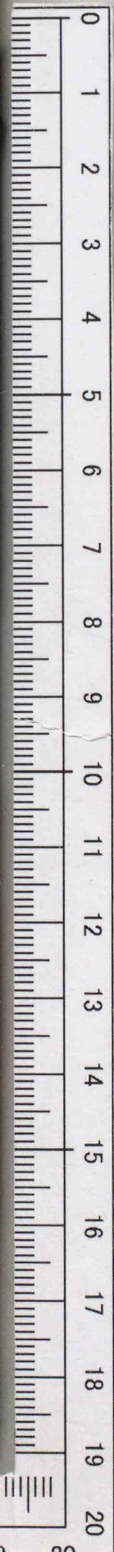


3759  
M14  
資料室

初等科國語

三

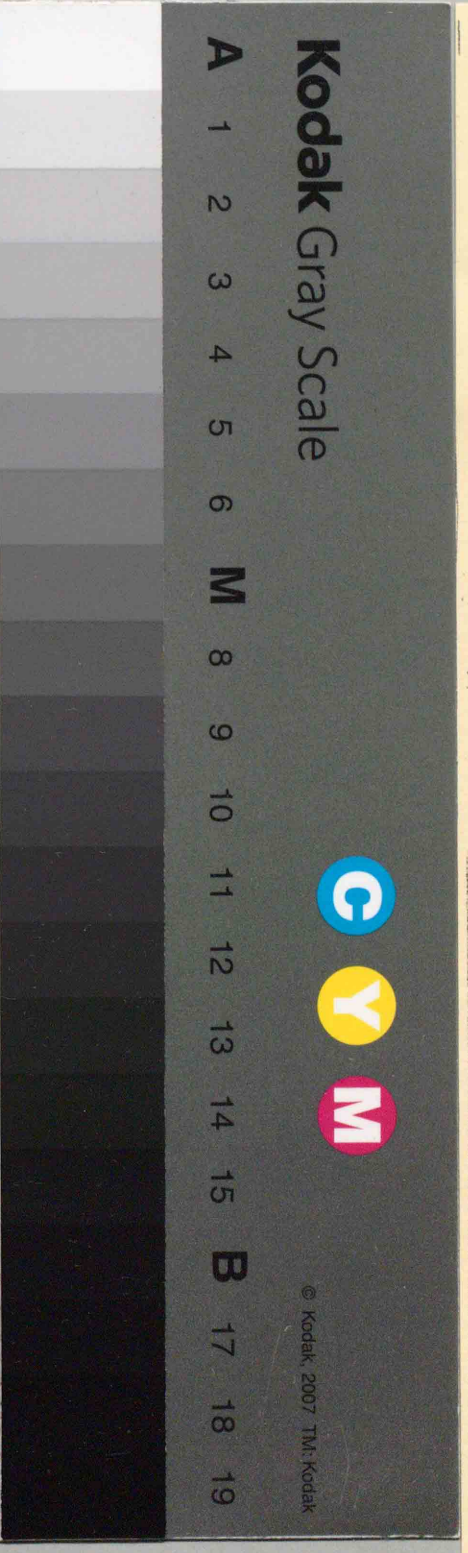
文部省



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

41383  
教科書文庫  
4  
8/0  
31-1942  
2002.3.21.867



資料室

375.4  
M114

初等科國語 三

文部省

もくろく

一	朝の海へ	四
二	潮干狩	六
三	日本武尊	十四
四	君が代少年	二十三
五	靖國神社	三十
六	光明皇后	三十二
七	苗代のころ	三十六
八	地鎮祭	三十九
九	笛の名人	四十五
十	機械	四十八
十一	出航	五十一



十二	千早城	五十七
十三	錦の御旗	六十一
十四	國旗掲揚臺	六十五
十五	夏	七十四
十六	兵營だより	七十七
十七	油蟬の一生	八十五
十八	とびこみ臺	九十
十九	母馬子馬	九十四
二十	東郷元帥	九十七
二十一	くものす	百二
二十二	夕日	百六
二十三	秋の空	百八
二十四	濱田彌兵衛	百九

朝の海へ



朝の潮風あびながら、  
弟と二人、海べをかける。  
しめつた砂をけりながら、  
波うちぎはを、どんどんかける。

明かるい海だ、どこまでも。  
地平線は銀色で、  
空と海とがとけあつて、

明かるい海だ、どこまでも。  
ぼくらは石を投げてみた、  
「一二の三。」で投げてみた。  
弟の石が海に落ち、  
つづいてぼくのが海に落ち。  
かもめが五六羽とんで来て、  
波にゆられて浮かんでる。  
水にもぐつてひよいと出て、

ひよいと浮かんでまたもぐる。

風に向かつてぼくたちは

両手をあげて息を吸ふ。

朝の海べはもう春で

みんな楽しい、新しい。

二 潮干狩

海岸は、一面に潮が引いてゐて、もう大勢の人たちが潮干狩をしてゐました。

先生は、私たち四年生の人員をお調べになつてから、次のやうにおつしやいました。

「これから潮干狩をするのですが、いつものやうに、四人づつ一組になつて、仲よく貝をお取りなさい。さうして、海には、どんな生きものがあるかを、よく氣をつけて見るやうになさい。」

勇さんと、正男さんと、花子さんと、私と、四人が一組になつて、ほり始めました。小さな熊手くまてで砂をかくと、かちりとさはるものがあります。三センチぐらゐのあさりでした。あさは、こんな浅いところに、もぐつてゐるのかなと思ひ

ながら、むちゆうになつてほつて行きました。おもしろいほど、たくさん出て来ました。」

ほつたあとに水がしみ出て、まはりの砂が少しづつづれて行くので、手ですくつて、かい出しました。すると、小石のやうなものが手にさはりました。砂を拂つてよく見ると、大きなはまぐりでした。はまぐりは、あさりよりも、少し深いところにあることがわかりました。

「おや、こんな貝が出た。」

と、正男さんが、六七センチもある細長い貝を、みんなの前へ出しました。みんなは、

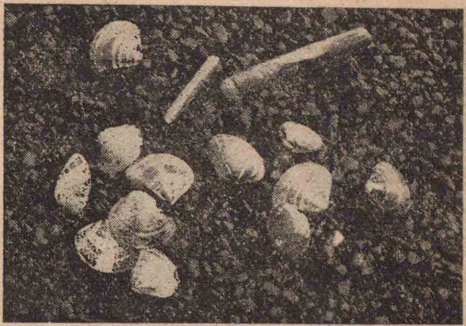
「何といふ貝だらう。」

といつて、いろいろ、貝の名前を思ひ出して、みましたが、だれにもわかりません。

「先生に聞きに行きませう。」

と、花子さんは、その貝を持って、先生のところへ走つて行きました。先生は、





「これは、いいものを見つけましたね。まてがひといふ貝ですよ。持つて歸つて、みんなで標本を作つてごらんなさい。」とおつしやいました。

私たちは、波うちぎはを、ぱちやぱちや歩きながら、子牛がねてゐるやうな岩の方へ行きました。

ひやりと、足にさはるものがありました。拾つて見ると、ぬらぬらした、茶色な海藻（かきさう）でした。はばの廣いひものやうな形をしてゐます。

「おや、春枝さんは、わかめを拾ひましたね。」

と、花子さんがいひました。私は、これがあのおわんの中に浮いてゐるわかめかと思ひました。

「ぼく、こんなおもしろいものを見つけたよ。」

どうれしさに笑ひながら、勇さんが走つて來ました。手には、葉の根もとにまるい玉のやうな袋のついてゐる、茶色な海藻を持つてゐました。

「おい、きみたち、このまるい玉を、みんなで持ちたまへ。いいかい。さあ、指で勢よくつぶすのだよ。」

と、勇さんがいつたので、私たちは、みんな指先に力を入れました。「パチン」と音がして、まるい玉がはじけました。

「おもしろいなあ。もう一ぺんやらう。」  
と、みんなで、「パチン、パチン。」とつぶしました。

先生がごらんになつて、

「おもしろいことをしてみますね。」

その海藻は何だか知つてみますか。」

とおたづねになりましたが、だれも知りません。

「ぼんではらといふものです。こんぶとい

つしよに、お正月のおかざりにするでせう。」

と、先生がおつしやいました。

私たちは、先生といつしよに、岩のそばへ行きました。岩



の間のすきとほつた水の中で、きれいな六七センチばかり  
の魚が、からだをくねらせて、岩に生えた海藻の間を上手に  
泳いでみました。べらといふ魚ださうです。

何とかしてべらを取りたいと思ひました。先生にお願い

ひしますと、先生は、たもで勢よく、さつとおすくひになりま

した。べらが、たもの中でぴちぴちとはねました。

海岸で、晝のおべんたうをたべました。

そのころから、潮がだんだんさして来て、私たちの歸る時  
には、あのあさをほつたところも、海藻を拾つた波うちぎ  
はも、もうすつかり、海の水でかくされてみました。



三

やまとたけるのみこと  
日本武尊

川上たける

熊襲のかしら川上たけるは、力のあるにまかせて、四方に勢を張り、のちには、朝廷の仰せにも従ひませんでした。

「西の國で、自分より強い者はない。」と思ふと、たけるは、だんだん増長して來ました。「ひとつりつばな宮殿を建て、たくさんさんの兵士に守らせて、大いにいばつてやらう。」と考へました。

いよいよ家もできあがつたのである日、お祝ひをするこ  
とになりました。

その日は、朝から、大勢の人が出はいりしました。手下の者はいふまでもなく、手傳ひのために、たくさんさんの男や女が集つて來ました。

そのうちに、一人の美しい少女がまじつて、かひがひしく働いてあました。酒もりが始ると、この少女も座敷へ出て、酒をついでまはりました。

だんだん夜がふけて來ました。客も、じだいに歸つて行きました。たけるは、もうねようといふので、酒によつてよろししながら、奥の間へ行かうとしました。



この時でした。今まで、やさしくお給仕をしてゐた少女は、すつくと立ちあがつて、

「たける、待て。」

といふが早いか、ふところにかくしてゐた劔を抜いて、たけるの胸を突きました。

「あつ。」とさけんで、たけるは倒れました。ふり返ると、少女はいかにも尊いおげんに満ちて、立つて

をります。たけるは思はずぶるぶると身ふるひをして、

「お待ちください。これほどに強いあなたはただの人ではない。いつたい、どういふお方ですか。」

と、苦しい息の下からたづねました。

「自分は女ではない。天皇の御子、やまどをぐな。汝、おそれ多くも、朝廷の仰せに従ひまつらぬによつて、汝を討てどの勅をかうむり、ここへ来たのである。」

「なるほど、さういふお方でいらつしやいましたか。西の國では、私より強い者はないので、たけると申してをりました。失禮ながら、ただ今、お名をさしあげませう。日本

でいちばんお強いあなたは、日本武皇子と仰せられますやうに。」

といひ終つて、たけるは息が絶えました。

景行天皇の御子、やまとをぐなの皇子は、御年十六、かうして、ただお一人で、熊襲をおほろぼしになりました。さうして、これからのち、日本武尊と申しあげることになりました。

草薙劔

熊襲を討つて、都へお歸りになつた日本武尊は、そののち、東の國のわる者を平げよといふ勅をお受けになりました。尊は、わづかの供人をつれて御出發になりました。

途中、まづ伊勢の皇大神宮に參つて、御武運をお祈りになりました。皇大神宮に仕へておいでになつた、尊の御をば倭姫命は、尊が二度の大任をお受けになつたのを、勇ましくも、また、いたはしくお思ひになつたのでせう、特に、大切な天叢雲劔を尊にお授けになりました。また、一つの小さな袋をお渡しになつて、

「もしものがあつたら、忘れずに、この袋の口をおあけなさい。」

とおつしやいました。

尊は、東へ東へと進んで、駿河の國にお着きになりました。

この國にみたわる者のかしらはかねて、尊の御勇武を聞き傳へて知つておましたので、一通りではとても勝てないだまし討ちにするほかはないと思ひました。

そこで、尊をうやうやしく迎へて、いろいろおもてなしをしながら申しました。

「この國の野原には、大きな鹿よかがたくさんをります。おなぐさみに、狩をなさつてはいかがでございます。」

尊は、「それはおもしろからう。」とおつしやつて、野原へお出になりました。身の丈にもあまる草を分けて、だんだん奥へはいつていらつしやいました。すると、かねてから、こ



の野原をかこんで待ちかまへてみたわる者どもは、一度に草に火をつけました。火はものすごい勢でもえて來ます。

「さては、だましたのか。」

と、尊はしばらく考へていらつしやいました。ふと御心に浮かんだのは、御をば倭姫命のおことばです。急いで袋の口をおあけになると、中に火打石がありました。

尊は、すぐにおさとりになりました。天叢雲劔を抜いて、手早くあたりの草をなぎ拂ひ、火打石で火をきつて、その草におつけになりました。すると、ふしぎにも、今までもえせまつて来た火は、急に方向をかへて、向かふへ向かふへと、もえ移つて行きました。

あわてたのは、わる者どもです。火に追はれて、逃げようとするまもなく、かたはしから焼きたてられ、焼き殺されてしまひました。

あやふい御いのちをお助りになつた尊は、生き残つたわる者どもを平げて、なほも東へお進みになりました。

この時から、この御劔を、草薙劔と申しあげることになりました。熱田神宮におまつりしてあるのが、この御劔であります。

#### 四 君が代少年

昭和十年四月二十一日の朝、臺灣で大きな地震がありました。

公学校の三年生であつた徳坤といふ少年は、けさも目がさめると、顔を洗つてから、うやうやしく神だなに向かつて、拜禮をしました。神だなには、皇大神宮の大麻がおまつり



してあるのです。

それから、まもなく朝の御飯になるので、少年はその時外へ出て、また父を呼びに行きました。

家を出て少し行つた時、「ゴ—」。

と恐しい音がして、地面も、まはりの家も、ぐらぐらと動きました。「地震だ。」と、少年は思ひました。そのとたん、少年のからだの上へ、そばの建物の土角どかくがくづれて来ました。土角といふのは、粘土ねんどを固めて作つた煉瓦れんがのやうなものです。

父や、近所の人たちがかけつけた時、少年は、頭と足に大けがをして、道ばたに倒れてあました。それでも父の姿を見ると、少年は、自分の苦しいことは一口もいはないで、

「おかあさんは、大丈夫でせうね。」  
といひました。

少年の傷は思つたよりも重く、その日の午後、かりに作られた治療所ちりょうじょで手術を受けました。このつらい手當てあての最中にも、少年は、決して臺灣語を口に出しませんでした。日本人は國語を使ふものだと、學校で教へられてから、徳坤は、どんなに不自由でも、國語を使ひ通して来たのです。

徳坤は、しきりに學校のことをいひました。先生の名を

呼びました。また、友だちの名を呼びました。

ちやうどそのころ、学校には、何百人といふけが人が運ばれて、先生たちは、目がまはるほどいそがしかつたのですが、徳坤が重いけがをしたと聞かれて、代りあつて見まひに來られました。

徳坤は、涙を流して喜びました。

「先生、ぼく、早くなほつて、学校へ行きたいのです。」

と、徳坤はいひました。

「さうだ。早く元氣になつて、学校へ出るのですよ。」

と、先生もはげますやうにいはれましたが、しかし、この重い傷ではどうなるであらうかと、先生は、徳坤がかはいさうでたまりませんでした。

少年は、あくる日の晝ごろ、父と、母と、受持の先生にまもられて、遠くの町にある醫院へ送られて行きました。

その夜、つかれて、うとうとしてゐた徳坤が、夜明近くなつて、ぱつちりと目をあけました。さうして、そばにゐた父に、「おとうさん、先生はいらつしやらないの。もう一度、先生におあひしたいなあ。」

といひました。これつきり、自分は、遠いところへ行くのだと感じたのかも知れません。

それからしばらくして、少年はいひました。

「おとうさん、ぼく、君が代を歌ひます。」

少年は、ちよつと目をつぶつて、何か考へてゐるやうでしたが、やがて息を深く吸つて、靜かに歌ひだしました。

きみがよは

ちよに

やちよに

徳坤が心をこめて歌ふ聲は、同じ病室にある人たちの心に、しみこむやうに聞えました。

さざれ

いしの

小さいながら、はつきりと歌はつづいて行きます。あちこちに、すすり泣きの聲が起りました。

いはほとなりて

こけの

むすまで

終りに近くなると、聲はだんだん細くなりました。でも、最後まで、りつぱに歌ひ通しました。

君が代を歌ひ終つた徳坤は、その朝、父と母と、人々の涙にみまもられながら、やすらかに長い眠りにつきました。



五 靖國神社

春は九段のお社に、  
櫻が咲いてをりました。

日本一の大鳥居、  
かねの鳥居がありました。

とびらは金の御紋章、  
御門を通つて行きました。

かしは手うてばこうこうと、  
心の底までひびきます。

櫻の花の遺族章、  
女の人も見えました。

遊就館の入口に、  
人が並んでをりました。

六 光明皇后

聖武<sup>しやうむ</sup>天皇の皇后を、光明皇后と申しあげます。

そのころ、都は奈良<sup>なら</sup>にありました。野も、山も、木立も、みどりにかがやく奈良の都には、赤くぬつた宮殿や、お寺のお堂が、あちらこちらに見えてあました。その中に、光明皇后のお建てになつた、せやく院といふ病院が立つてあました。せやく院には、大勢の病人がおしかけて、病氣をみてもらつたり、薬をいただいたりしてあました。

「この子は、ひどい目の病でものが見えなくなり、はしないかと心配しましたが、毎日、かうして薬をいただいたてある



おかげで、たいそうよくなりました。」

どうれしさうにいふ母親もありました。私は、おなかの病氣で、長い間寝てあました。が、このごろは、おかげで、たいぶよくなりました。これも、みんな皇后様のお恵みで、ございます。」

と涙をこぼして、ありがたがるおばあさんもありました。

光明皇后は、ときどき、この病院へおいでになつて、病人たちをお見まひになりました。やさしいおことばを、たまは

ることさへありました。

このやうにしんせつにしていたかくので、どんな重い病氣でも、きつとなほるといふうはさが、いつのまにか日本中にひろがりました。

光明皇后は、手足の痛む病人や、傷の痛みがなほらないやうな者のために、薬の風呂ふろを作つておやりになりました。この風呂には、いつもあたたかい薬の湯が、あふれてあました。

「皇后様が、御自分で、病人のせわをなさるといふことだが、ほんたうだらうか。」

「ごんなにしんせつにしていただいてあれば、皇后様におせわをしていただくのと、同じことではないか。」

「まつたくその通りだ。うはさに聞けば、皇后様は、千人の病人のせわをなさるといふ大願をお立てになつたさうだ。ほんたうにもつたいないことだ。」

このやうな話をしながら、薬の風呂にはいる病人が、いつも絶えませんでした。

光明皇后はこの薬の風呂へもおいでになつて、一人一人をおせわなさいました。さうして、千人めの病人のおせわをなさつた時、急に病人のからだから光がさし出て、あたり

が金色にかがやき渡つたといふことです。

七 苗代のころ

春の少し暖い晩、「くくく」と蛙の  
鳴く聲がします。

そのころから、晝間は、廣いたんぼの  
一部で、もう苗代の仕事が始ります。  
黒い牛が、ゆつくりと引いて行くから  
すきのあとには、ほり返された新しい  
土が、暖い日光に照らされます。

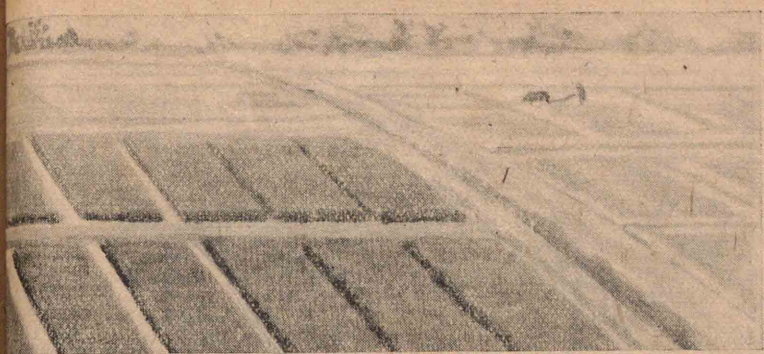


土がほり返され、くれ打ちがすむと、田に水がなみなみと  
張られます。今度は、牛がまぐはを引いて、泥水の中を、行つ  
たり来たりします。かうして、田の土は、だんだんこまかく  
耕されて行きます。

夜、遠くの田で鳴く蛙の聲が、「ころころ、ころころ」と、にぎ  
やかに聞え始めます。

種まきがすんで十日あまりたつたころ、浅い水の上に、二  
センチか三センチぐらゐの、若々しいみどりの苗が出そろ  
つて行くのは、見ただけでも氣持のよいものです。ちやう  
ど、たんざく形のみどりの敷物を、きちんと間を置いて、敷き

並べたやうです。



苗が二十センチぐらゐにのびて、葉先が朝風にかかるくゆれるやうになると、廣いたんぼは、しだいにぎやかになります。そろそろ、汗ばむくらゐ暑い日ざしを受けて、男も、女も、牛も、泥田の中で働きます。この田も、あそこの田も、ほり返した土のかたまりの間には、もうひたひたと、水がたたへられてゐます。

蛙のすみかが、がうして、たんぼいつぱい

にひろがるのです。晝間は、働く人や、牛に急んりよをするやうに、聲をひそめてゐますが、夕方から夜になると、さも自分たちの世界だといふやうに、さわぎたてます。家の前も、後も、横も、まるで夕立の降るやうに、蛙の聲でいつぱいです。静かだといふあなかの夜も、このころは、雨戸をしめてから、始めてほつとするほどです。

もうまもなく、田植が始ります。

### 八 地鎮祭

私たちの学校では、新しい講堂が立つことになりました。

今日は、その地鎮祭がありました。

講堂は、東側の教室の後に立ちます。午前十時に、四年以上の生徒が、そこに集合しました。

校長先生が、地鎮祭といふのは、新しく家が立つ土地の神様に申しあげて、その家を、いつまでも守つていただくやうに、お祭をするだいな儀式だ、とお話なさいました。

敷地の中ほどに、せいの高い竹が四本立ててあつて、それにしめなはが張つてありました。

そこへ神主さんが、三人お見えになりました。三人ともまつ白な着物を着て、えぼしをかぶつて、しやくを持つて、木のくつをはいてあられました。

「氣をつけ。」

と、山田先生が號令を掛けられると、校長先生が、

「今から、地鎮祭が始ります。」

といはれました。

神主さんは、大麻をふつて、みんなのおはらひをしてくださいました。それから、「オー」と聲を高くあげて、神様のおいでになる先拂ひをなさいました。

次に、お供へものをいろいろと、白木の机の上に運ばれました。お米や、お酒や、お餅や、魚、大根にんじん、おしまひに、い



ちごバナナなどを、それぞれ三方にのせて供へられました。

明かるい日光をあびて、祭壇が美しく、にぎやかに見えました。

神主さんが、のりどを讀まれました。私たちに、その意味はよくわかりませんが、おちついた聲で、うやうやしく讀まれました。

それから、地面のおはらひをして、うがちぞめがありました。うがち

ぞめといふのは、鍬で土をほる儀式であります。

校長先生が、先生がたを代表して、玉ぐしをあげて拜まれました。次に、高等科の人が、全校の生徒を代表して玉ぐしをあげて拜みました。

終りに、お供へしたものをみんなさげてから、神様のお歸りになる先拂ひがとなへられました。

「休め。」

山田先生の聲がしました。三人の神主さんが、静かに、私たちの前を通つて歸られました。その時、あの白い着物が、ほんたうに美しいと思ひました。

山田先生が、

「これで、地鎮祭はすみました。今日は、學校として、記念すべきおめでたい日ですから、みんなで元氣よく、校歌を歌ひませう。」

といはれました。

私たちは、聲をそろへて校歌を歌ひました。歌ひながら、このあき地に、講堂がりつぱに立つた時のことを思ひ、新しいその講堂に、全校の先生も、生徒も、いつしよに集つて並んだ時のことを思つて、うれしさでいつぱいになりました。

九 笛の名人

笛の名人用光もちみつは、ある年の夏土佐とさの國から京都へのぼらうとして、船に乗つた。

船がある港にとまつた夜のことであつた。どこからかあやしい船が現れて、用光の船に近づいたと思ふと、恐しい海賊が、どやどやと乗り移つて来て、用光をとり圍んでしまつた。

用光は、逃げようにも逃げられず、戦はうにも武器がなかつた。とても助らぬと覺悟をきめた。ただ、自分は樂人で



あるから、一生の思ひ出に、心残りなく笛を吹いてから死にたいと思つた。それで、海賊どもに向かつて、

「かうなつては、おまへたちには、とてもかなはない。私も覺悟をした。私は樂人である。今ここで、命を取られるのだから、この世の別れに、一曲だけ吹かせてもらひたい。さうして、こんなこともあつたと、世の中に傳へてもらひたい。」

といつて、笛を取り出した。海賊どもは、顔を見合はせて、

「おもしろい。まあ、ひとつ聞かうではないか。」

といつた。

これが、名人といはれた自分の最後の曲だと思つて、用光は、靜かに吹き始めた。曲の進むにつれて、用光は、自分の笛の音によつたやうに、ただ一心に吹いた。

雲もない空には、月が美しくかがやいてゐた。笛の音は、高く低く、波を越えてひびいた。海賊どもは、じつと耳を傾けて聞いた。

目には涙さへ浮かべてゐた。やがて曲は終つた。



「だめだ。あの笛を聞いたら、わるいことなんかできなくなつた。」

海賊どもは、そのまま、船をこいで歸つて行つた。

十 機械

工場だ、

機械だ。

鐵だよ、音だよ。

どとどん、どとどん。

ピストン、

腕だよ。

あつちへ、こつちへ、

がたとん、がたとん。

車だ、

車輪だ。

ぐるぐる まはるよ。

ぐるぐる、ぐるぐる。

車輪と

車輪に、

皮おび すべるよ。

するする、するする。

齒車、

齒車、

齒と齒とかみ合ひ、

ぎりぎり、ぎりぎり。

動くよ

音だよ

鐵だよ、ぐるぐる、

がたどん、どどん。

十一 出航

今日、みなさんは、一萬トンの汽船に乗つて、神戸の港をた  
つのだと考へてください。

みなさんに乗せる船は、今さかんに起重機を動かして、荷

物を積んであります。

みなさんといつしよに、あとからあとから、乗客が乗りま

す。船の出る前は、ほんたうに景氣の

いいものです。

甲板かんばんに出て並びませう。向かふは

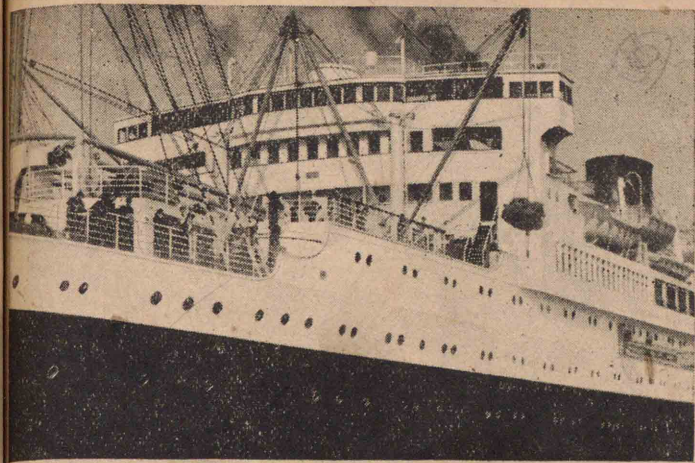
上屋うはで、見送りの人が、いつばい並んで

みます。みなさんのおとうさんや、お

かあさんも、あられるはずです。

あけたたましいどらの音がします。

まもなく出航です。見送りの人や、積



荷をして、あなたたちは、これを合圖に、船からおりて行くの  
です。

勇ましい樂隊の音楽が聞えますね。軍艦マーチが聞え

ます。愛國行進曲が聞えます。さあ、私たちも、いつしよに

歌はうではありませんか。

いよいよ出航です。あのうなるやうに大きな汽笛の音

をお聞きなさい。

船は、静かに岸壁がんべきをはなれて行きます。

上屋の人たちが、一生けんめいで、ハンケチや帽子を振つ

てあります。さあ、みなさんもお振りなさい。大きな聲で、「お

どうさん、行つてまゐります。」「おかあさん、行つてまゐります。といつておあげなさい。

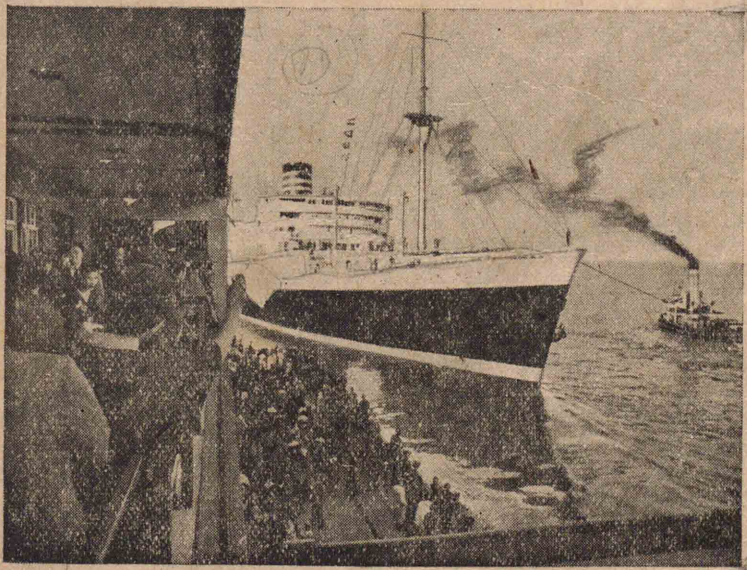
船が港を出る時は、途中まで、あの小さな汽船に、引っぱられて行くのです。ちよつと、妙なかつかうでせう。ちやうど、子犬が、象ぞうでも引っぱつて行くやうです。

もう、上屋の人は、だれがだれだか、はつきりわからなくなりました。それでも、みんな合圖あひづらをしてゐます。ごらんなさい。

だれか女の人が、赤い日がさを振つてゐるではありませんか。いよいよ、小さな汽船からはなれて、私たちの船は、ひとりで走り始めました。さあ、これから、だんだん早くなりますよ。もう、上屋の人は、たいてい、歸つて行きました。

右の方に、林のやうに見える起重機——あれは造船所です。今、新しい船を何ぞうか、こしらへてゐるのが見えるでせう。

港内には、ずあぶん船があますね。何ぞうあるでせう。ちよつと、数へきれませんね。大きいのは、満洲や、支那や、南



洋などへ行く船です。みんな貨物船のやうです。

さあ、港の口の防波堤へ来ました。あれを越すと、きれいな瀬戸内海へ出ます。

ごらんなさい。神戸の市街が、まるで繪のやうに美しく見えるではありませんか。

この船は、あすの朝門司へ着いて、正午ごろ門司を出航します。

それから先は、どこへ行くのでせうか。みなさんは、どこへ行きたいと思ひますか。

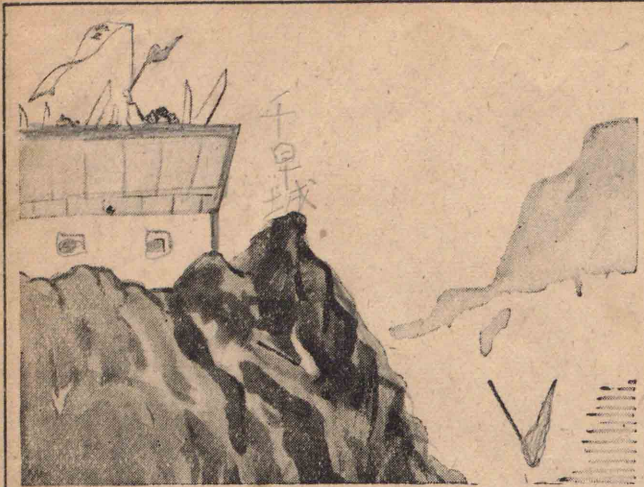
十二 千早城

楠木正成くすのきまさしげがたてこもつた千早城は、けはしい金剛山こんがうざんにあるが、まことに小さな城で、軍勢もわづか千人ばかり。これを圍んだ賊は、百萬といふ大軍で、城の附近いつたいは、すつかり人や馬でうづまつた。

こんな山城一つ、何ほどのことがあるものかと、賊が城の門まで攻めのぼると、城のやぐらから大きな石を投げ落して、賊のさわぐところを、さんざんに射た。賊は、坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

これにこりて、賊は、城の水をたやして、苦しめようとはか  
つた。

まづ、谷川のほとりに、三千人の番  
兵を置いて、城兵が汲みに来られな  
いやうにした。城中には、十分水の  
用意がしてあつた。二日たつても、  
三日たつても、汲みに来ない。番兵  
がゆだんをしてゐると、城兵が切り  
こんで来て、旗をうばつて引きあげ  
た。



正成は、この旗を城門に立てて、さんざんに賊のわる口を  
いはせた。賊が、これを聞いて、くやしがつて攻め寄せると、  
正成は、高いがけの上から大木を落させた。さうして、これ  
をよけようとして、賊のさわぐところ  
を射させて、五千人餘りも殺した。  
この上は、ひやうらう攻めにしよう  
として、賊は、攻め寄せないことにした。  
ある朝まだ暗いうちに、城中から討  
つて出て、どつとどきの声をあげた。  
賊は、「それ、敵が出た。一人ものがすな。」

と押し寄せた。城兵はさつと引きあげたが、二三十人だけはふみとどまつた。賊が四方からこれをめがけて押し寄せると、城から大きな石を四五十、一度に落したので、また何百人か殺された。ふみとどまつてゐたのはみんなわらわら形であつた。

もうこの上は何でもかでも攻め落してしまへといふので、賊は大きなはしごを作り、これを城の前の谷に渡して橋にした。幅が一丈五尺、長さが二十丈、その上を賊はわれ先にと渡つた。今度こそは、千早城も危く見えた。すると、正成は、いつのまに用意しておいたものか、たくさんのたいまつを出して、これに火をつけて、橋の上に投げさせた。さうして、その上へ油を注がせた。橋は、まん中からもえ切れて、谷底へどうと落ちた。賊は何千人か死傷した。

賊が千早城一つをもてあましてゐると、方々で、官軍がひやうらうの道をふさいだので、賊はすっかり弱つた。百人逃げ二百人逃げして、初め百萬といつた賊も、しまひには十萬ばかりになつた。それが前後から官軍に討たれて、ちりちりに逃げてしまつた。

## 十三 錦の御旗



大塔宮は、北條高時征伐のため、兵をお集めにならうとして、大和の十津川から高野の方へお向かひになつた。お供の者は、わづかに九人であつた。

途中には、敵方の者が多かつた。中にも、芋瀬の莊司は、宮のお通りになることを知つて、道に手下の者を配つてゐた。宮は、どうしても、そこをお通りにならなければならなかつた。

お供の中に、村上彦四郎義光といふ人がゐた。このへんの敵のやうすを探るために、思はず時を過して、宮のおあとから急ぎ足に道をたどつて來たが、ふと見ると、向かふに、日

月を金銀で現した錦の御旗をおし立ててゐる者がある。義光は、ふしんの眉をひそめた。あれこそは、大塔宮の御旗である。もしや、宮の御身に、何事が起つたのではなからうか。義光は、胸をとどろかした。

急いで近寄ると、芋瀬の莊司が、家來の大男に宮の御旗を持たせて、さもとくいさうに、何か聲高く話してゐるのに出あつた。

義光は大聲に、

「見れば尊い錦の御旗、どうしてそれを手に入れたのか。」  
とつめ寄つた。

莊司は、わうへいに答へた。

「大塔宮を御道筋に待ち受け

申し、この御旗を、この莊司が

手に入れたのだ。」

義光は、かつと怒つた。

「それはけしからぬ。おそれ

多くも宮の御道筋をふさい

だ上に、錦の御旗をけがした

てまつるとは。」

と叫んで御旗をうばひ取るが

早いか、かの大男をひつつかんで、まりのやうに投げつけた。

錦の御旗を肩にかけ、相手をにらみつけながら、おちつき

はらつて、その場をたち去つた。義光は、やがて宮に追ひつき

たてまつつた。

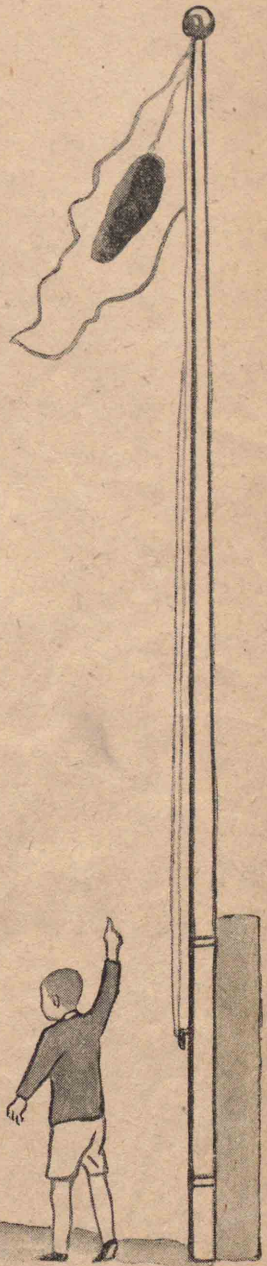
大塔宮は、義光の忠義を心からお喜びになつた。

十四 国旗掲揚臺

一

国旗掲揚臺のそばに、勇さんと、正男さんと、春枝さんの三人が集つてゐる。三人とも、旗竿の先を見あげてゐる。





勇 「ずあぶん、高いなあ。」

正男 「どのくらいあると思ふ。」

勇 「さあ、十四メートルくらいかな。」

正男 「ぼくは、十三メートルないと思ふ。」

勇 「春枝さんはどのくらい。」

春枝 「さうね。十メートルくらいかしら。」

そこへ花子さんが来る。

花子 「みんな、ここで何をしてゐるのですか。」

春枝 「あの国旗掲揚臺の高さを、あててゐるのです。」

花子さんも旗竿の先を見あげる。

春枝 「花子さんはどのくらいと思ひますか。」

花子 「十一メートルはあると思ひます。」

春枝 「あら、みんなちがひますね。だれが、いちばん正しいで

せう。」

正男 「何とかして、きちんと高さを計れないものかな。」

二

それから、三日ばかりたつたある日、正男さんが、自分のかけ

を見ながら考へこんでゐる。

正男「げさは、ぼくのかげが、ずつと長くのびてゐたのに、今見ると、こんなに短くなつてゐる。ぼくのせいの高さに変りはないのに、かげだけが、あんなにのびたりちぢんだりするのだな。」

正男「待てよ、かげがのびたりちぢんだりしてゐる間に、ぼくのせいの高さと同じ長さになる時があるにちがひない。いや、きつとあるはずだ。」

歩くのをやめて、立ち止る。急に思ひついたらしく、手をうつて、

正男「さうだ、さうだ。かうすればいいんだ。いい考へが浮かんだ。」

さもうれしさうに、にこにこする。

三

國旗掲揚臺の前に、みんな集つてゐる。

正男「正男くん、わかつたつて、ほんたうにわかつたのか。」

正男「わかつた、ほんたうにわかつた。」

春枝「どうすればいいのですか。」

正男「まづ、ぼくのかげを計るのです。」

花子「かけを。」

正男「さう。」

勇 「きみのかけを計るんぢやないよ。あの國旗掲揚臺の  
高さを計るんだよ。」

正男「まあ、待ちたまへ。かういふわけなんだ。」

正男さんは、巻尺を勇さんに手渡して、

これで、ぼくのかけの長さを計つてくれたまへ。」

勇さんたちは、正男さんのかけを計る。

勇 「百二十八センチあるよ。」

花子「正男さんのかけを計つてから、どうしますの。」

正男「今、ぼくのかけが、百二十八センチあるでせう。ところが、ぼくのせいの高さは、百二十四センチなんです。あ  
と、しばらくで、かけが百二十四センチにちぢんで、ぼく  
のせいと同じ長さになります。」

勇 「わかつた、やつとわかつた。」

春枝「どうなるのですか。」

勇 「正男くんのせいと、かけの長さと同じになつた時刻は、  
あの國旗掲揚臺の高さと、かけの長さが同じになると  
いふわけだらう。」

正男「さう、さう。」

春枝「それで、その時刻に、あの国旗掲揚臺のかげの長さを計  
るのですね。」

正男「そのとほりです。」

勇「うまいところに氣がついたな。」

花子「ほんたうですな。」

四

正男「さ、勇くん、ぼくが『ようし。』といつたら、国旗掲揚臺のか  
げの端に、しるしをつけてくれたまへ。」

勇さんは、国旗掲揚臺のかげのところへ行つて、しるしをつ  
ける用意をする。

春枝さんと、花子さんは、ぼくのかげが百二十四センチ  
になつた時、知らせてください。」

二人は、巻尺を張つて見つめてゐる。まもなく、

春枝「今、百二十四センチになりました。」

正男さんは、「ようし。」と叫ぶ。勇さんはしるしをつける。

勇「さ、みんな、で、いつしよに計つてみよう。」

みんな、「一メートル、二メートル、三メートル。」と聲を出して  
數へる。

みんな「十メートル、十一メートル、十二メートル。」

勇「ちやうど十二メートル。」

みんなあれが十二メートルの高さかな。

といつて、国旗掲揚臺の先を見あげる。

十五 夏

じりじりと、

照りつける太陽。

ごみつぽいでこぼこの道を、

トラツクが通る。

カーン、カーン、カーン。

けたたましい響きだ。

鉄工場の前。

その庭に、日まはりが咲いてゐる。

くるぐると、

茂つた夏草。木立には、

蟬が、

油を煮るやうに鳴きたてる。

びつしよりと、

軍服を汗ににじませて、

兵隊さんが通る、

一中隊ばかり。

「暑いなあ。」

だれもがさういふ。しかし、

夏ほど明かるくて、

さかんなものはあるまい。

十六 兵營だより

武男くん、お手紙ありがたう。班長殿に呼ばれて、きみから来た手紙を渡された時は、ほんたうにうれしく思ひました。

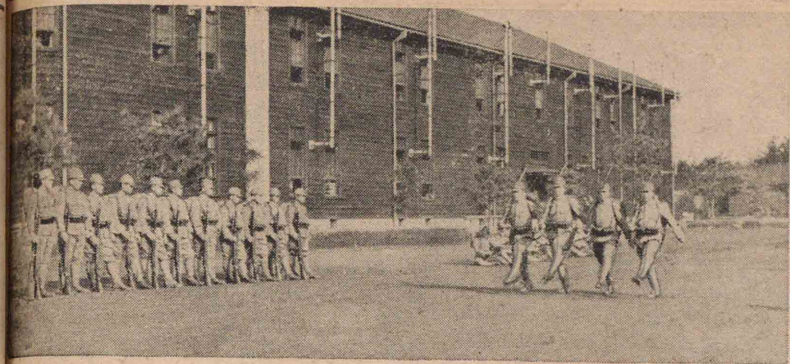
をぢさんや、をばさんもお變りないさうで、何よりです。

ぼくも、入營以來ずっと元氣です。このごろは、もうすっかり兵營生活になれて、毎日楽しい日を送つてゐます。

朝、起床ラツパが鳴ると、いつせいにね起きます。すばやく寢床をかたづけて、かわいた手拭で、からだを赤くなる



ほどこすります。それから、兵舎の前に並んで、點呼を受け  
 るのです。點呼がすむと、きれいな朝の空  
 氣を胸いつぱい吸つて、「一二三四」と、掛聲  
 勇ましく體操をしますが、その時は、何とも  
 いへないよい氣持です。



教練は、午前と午後にあります。「氣をつ  
 け」の姿勢をきちんとしたり、大きな目を見  
 はつて、くわつぱつに手をあげて敬禮をし  
 たり、背囊はいなうと銃を肩に、步調を合はせて勇ま  
 しく行進したり、「をりしけ。や、ふせ。」の姿

勢で、小銃を撃つけいこをしたりします。

時には、朝早くから、遠くへ演習に出かけることもありま  
 す。斥候せきこうになつて森や林の中をかけまはつたり、「パンパン、  
 パンパン」と、小銃や機關銃を撃つたり、相手の障地に、「わあつ。  
 と大聲をあげて、はげしく突撃したりします。このやうに、  
 野原や山を一日中かけまはつて、夕方おなかをぺこぺこに  
 して、なつかしい兵營へ歸つて來るのです。すぐに兵器の  
 手入れをして、夕飯をたべますが、そのおいしいことは、また  
 かくべつです。大きなアルミニウムの食器に、山もりに  
 した御飯を見るまに平げてしまひます。

夕食後は、ぼくらの最も楽しい時間で、お風呂へはいつたり、軍歌の練習をしたり、お汁粉や、大福餅をたべながら、お國じまんの話に花を咲かせたりします。

午後八時には、夜の點呼があるので、めいめいの部屋で整列して、週番士官殿の來られるのを待ちます。週番士官殿が見えると、班長殿は、

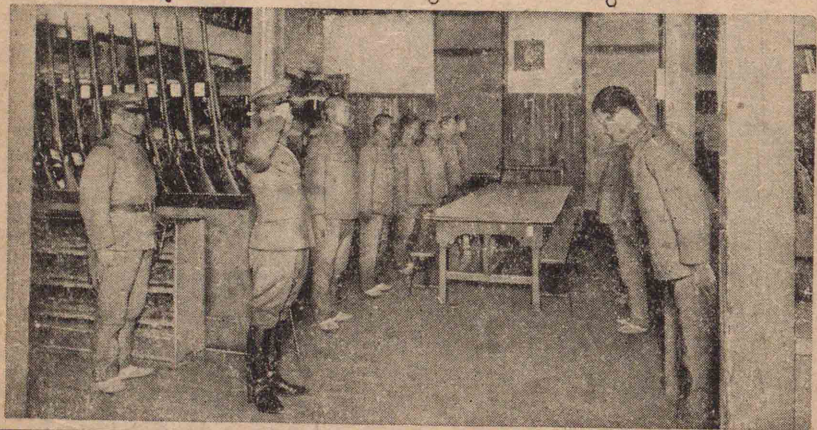
「**第一班**、**總員三十名**。事故なし。」

と、人員の報告をされます。それから、ぼくたちに向かつて、「番號」

といはれます。ぼくたちは、「今日もおかげで無事に終りました。」といふ心持で、「一、二、三、四、五、六。」と、大きな聲で、次々に番號を送つて行きます。

點呼が終ると、みんな聲をそろへて、おごそかな氣持で、軍人勅諭を奉讀します。静かな夜の兵營のどの室からも、力強い奉讀の聲が聞えて來るのは、この時です。勅諭の奉讀がすむと、班長殿から、いろいろの命令や注意などを受けます。

九時には、「みんなおやすみなさい。」と、**消燈**ラツパが鳴り渡るので、その前に、日



記をつけたり、手紙を書いたりします。

ぼくらが朝夕寝起きする室の壁ぎには、銃を立て掛けておくところがあつて、手入れのよくとどいた小銃が、行儀よく並んでゐます。両側には寝臺があつて、寝臺の後には、めいめいの持物を置いたながあります。その上に、ていねいにたたんだ軍服や、背囊などが、きちんと置いてあります。室のすみからすみまで、よくせいとんがしてありますから、いざといふ場合には、暗がりでも、すぐ武装ぶさうすることができます。

晝のつかれで、みんなやすやすと眠つてゐると、夜中に、

「武装して、兵舎の前に集れ。」

と、急に命令がくだることがあります。その時は、大急ぎで武装して、まつ暗な兵舎の前に整列せいれいします。

入營當初は、寒い風が吹きまくる營庭で、教練けうれんをしたり、つめたい水で食器を洗つたり、せんたくしたり、なかなか骨がをれましたが、だんだんなれて來ると、日々の仕事がおもしろく、ゆくわいになります。

兵營はいはば一つの大きな家庭で、中隊長殿を始め、上官のかたがたは、ぼくらを、自分の弟か子のやうにしんせつにしてくださいます。それで、みんなは仲よくはげましあつ

て、毎日、教練をしたり勉強したりして、軍人としてのりつばな精神を養つて行くのです。

武男くんたちも、やがては、かういふ兵營生活をするやうになるのですから、今のうちから、しつかりやるやうにしてください。

手紙を書いてある間に、いつのまにか九時前になりました。ちき消燈ラツパが鳴りますから、これでやめます。みなさんによろしく。さやうなら。

年月日

新一

武男くん

十七 油蟬あからせみの一生

油蟬の子は、土の中に住んでゐます。前足が丈夫ですから、けらやもぐらのやうに、土の中を上手にもぐつて行きます。たいていは、木の細い根をちくにして、まるい穴をほり、その中にはいつてゐます。油蟬の子の口には、針のやうな管がありますから、その管を木の根にさしこんで、汁を吸つて生きてゐます。それにしても、この油蟬の子は、いつ



どこで生まれたのでせうか。

夏の末になると、親蟬は木の皮にきずをつけて、その中に卵を生みます。卵は、そのまま冬を越して、あくる年の夏かへるのですが、その時は、二ミリぐらゐの小さな、白いうじのやうなものです。この小さな虫が、やがて木をおりて、いつのまにか、柔かい土の中にもぐりこんでしまひます。

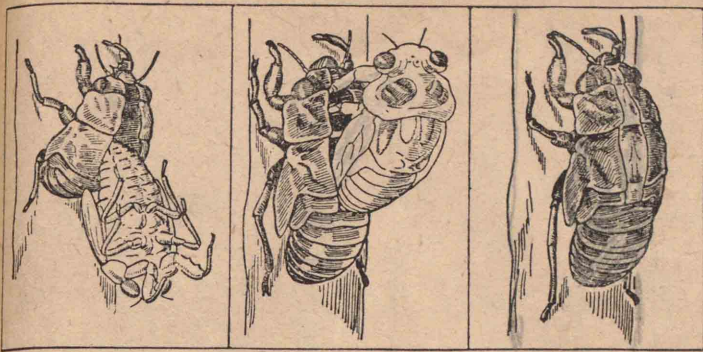
最初は、浅いところにゐますが、年を取るにつれて、だんだん深いところへはいつて行きます。からだも大きくなり、形も色も、だいに變つて、丈夫さうになります。

土の中へもぐつてから七年めに、やつと長い地下の生活が終るのです。そこで、油蟬の子は、深いところから、だんだん浅いところへ移つて、地上へ出る日の来るのを待つてゐます。

天氣のよい夏の夕方、油蟬の子は、今日こそと穴から地上へはひ出します。もう鳥などはたいてい寝てゐますが、それでも油蟬の子は用心して、急いで安全な場所をさがします。木とか、草とかにのぼつて、安心だと思ふと、前足のつめで、しつかりとそれにしがみつきます。すると、ふしぎにも前足は堅くその場所にくつついて、動かなくなります。

そのうちに、堅いせなかの皮が縦に割れて、中からみづみ

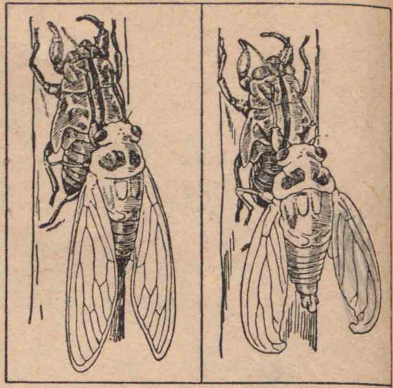
づしいからだが見えます。すぐにせなかが出る。頭が出る。つづいて足が出て來ます。もう残つたところは、腹の下の方だけです。



そこで、おもしろい運動を始めます。ぐつとそりかへるやうにして、頭を後へさげます。しばらくは、そのまま、じつと動かないでゐますが、やがて起き直つたと思ふと、からだは完全に抜け出します。しわくちゃになつてゐた羽が、みるみる延びて來ます。

もう、蟬の子ではありません。色はまだ青白くて、弱々しさうですが、形はりっぱな親蟬です。

夜風に當り、朝日に當ると、すつかり色が變つて、見るからに丈夫さうな油蟬になります。さうして、天氣のよい夏の日を、楽しさうに飛びまはり、鳴きたてます。



油蟬は、それから二三週間生きてゐます。満六年といふ長い地下生活にくらべて、なんと、いふ短い地上の命でせう。ところで、この六年でさへ長いと思はれるのに、外國には、十

何年も土の中にもぐつてゐる蟬があるといふことです。

十八 とびこみ臺

「向かふのとびこみ臺へ、泳いで行かう。」

といつて、本田くんといつしよに、肩を並べて泳いで行きました。

とびこみ臺の中段へあがつて、そこから、二人ともとびこみの練習をしました。が、本田くんの方が上手でした。

上のいちばん高い段からは、五年生の山本くんがとんであました。からだをぴんとのばして、臺の上から、まつさかさまに、水の中へずぶりとはいつて行くのは、いかにも愉快さうでした。

「わたなべくん、上の段からとばうよ。」

と、本田くんがいひましたので、いちばん上の段へのぼつて行きました。とばうと思つて下を見ると、何だかこはいやうな氣持がしました。

頭の上では、夏の太陽が、かんかんと照つてゐます。青い波はきらきらと光つて、目が痛いやうです。

「おい、早くとびたまへ。きみがとばなければ、ぼくがとべないぢやないか。」

と、本田くんが  
ひきました。

「よし。」

と、いつて、ちよつ

と下を見ると、足

がぴつたり板について、**離れない**やうな

気がします。

空では、大きな入道雲が笑つてゐます。

「弱虫、早くとびたまへ。」

と、山本くんがいったので、今度は、下を見ないで、向かふの山  
をじつと見つめました。

「えいつ。」

といひながら、思ひきつて、兩足で臺をけりました。

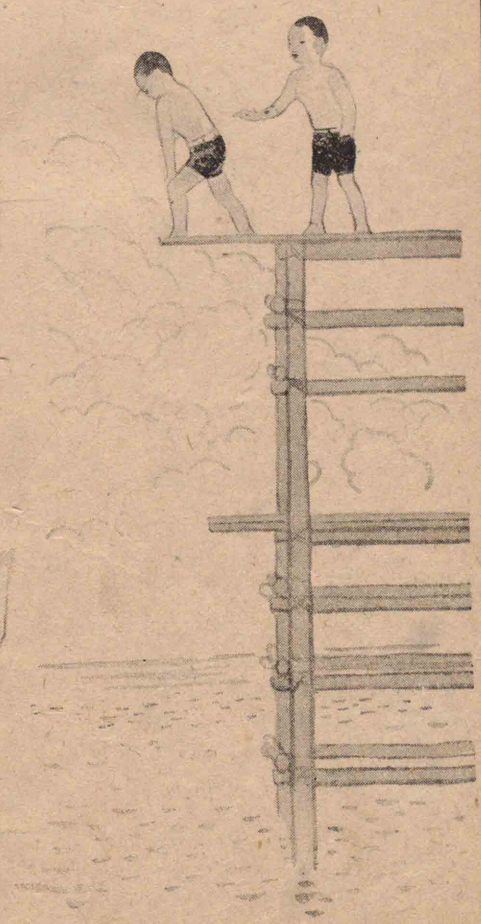
「あつ。」

と思つたその時、空と水がひつくり返つて、からだはもう水  
の中へもぐつてゐました。

水の上へ顔を出すと、本田くんと山本くんが、臺の上で笑  
つてゐました。

「おうい、ぼくのとび方は、どうだつたい。」

と聞きますと、二人は、





「よかつたよかつた。うまかつたよ。  
 とほめてくれました。  
 ぼくはどびこみ臺の方へ泳いで行きました。」

十九 母馬子馬



母馬子馬

沼ぬまの岸

夏のゆふべの柳かげ。

母が番して、

子の馬は、

ゆつくりゆつくり水を飲む。

まるくひろがる

水の輪が、

いくつも出ては消えるたび、

水にうつつた

三日月が、

ゆらゆら見えたりかくれたり。

母馬子馬

沼の岸

柳のかけが暮れて行く。

二十 東郷元帥とうがうげんすい

關東大震災の時であつた。

「ドドツ」といふものすごい地響きとともに、東京の何十萬の家は、一度に震動した。瓦かはらが落ちる、窓ガラスが飛ぶ、石垣がくづれる。傾く家、めちやめちやにつぶれる家もずゑぶん多かつた。

市民は、まつたく生きた氣持もなかつた。命からがら逃げ出した者も、しばらくは、つづいて起る餘震におどろいて、ただ「あれよ、あれよ」といふばかり。まして、けがをした者

や、つぶれた家の下敷きになつた者は、どんな氣持であつたらう。

東郷元帥の家は、質素な古い木造建であつた。はげしい震動に、この家も、たちまち壁はくづれ、屋根瓦はたいてい落ちてしまつた。

ちやうど、お晝の食事中であつた元帥は、家の人々といつしよに庭へ出たが、はげしい震動がひとまづ過ぎると、すぐに居間へとつて返した。たんすをあけて、みづから軍服を取り出し、手早く着かへた。さうして、胸には、うやうやしく勳章くんしょうをつけた。

「どうなさるのでございますか。」

といふ家人の問に對して、元帥はおごそかに、

「赤坂離宮へ。」

と答へた。

ひきつづき起る餘震に、家は震ひ、地はゆれ、市民があわてふためいてゐる中を、七十七歳の老元帥は、赤坂離宮へと急いだ。

當時、大正天皇は、日光にいらせられた。元帥は、赤坂離宮に、攝政殿下せつしやうをお見まひ申しあげたのである。

攝政殿下の御無事でいらつしやるのを拜した元帥は、胸

をなでおろしながら、三時ごろおいとまを申しあげて、自宅へ歸つた。

そのころ、東京市中はいたるところに火災が起つてゐた。歸るとすぐ、元帥は家の人に、

「陛下のお寫眞を、庭へお移し申せ。」

と命じた。

お寫眞は、庭の中央に安置された。

やがて、火は近くの家に起つた。元帥の家の人々は、手傳ひに、その方へかけつけて行つた。

ところが、火はたちまち元帥の家をおそつた。まづ、自動

車小屋が見るまに焼けた。

元帥は、家に残つてゐた人々を指圖しながら、みづから防火につとめた。

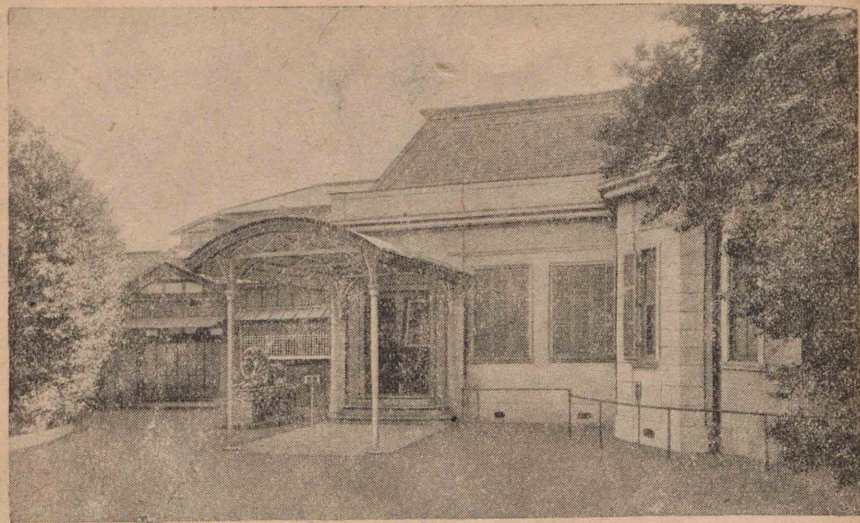
「あぶなうございます。どうぞ、お

たちのきください。」

と、人々がすすめても、元帥は、

「なに、大丈夫。もう少し。」

といつて、聞き入れなかつた。自分の家を焼くのは、近所の家々へ、めい



わくをかけることになる。守られるだけは守らなければ  
ならないといふのが、元帥の心であつた。

火は前後二回おそつたが、元帥の指圖と、集つて来た人々  
の働きによつて、消しとめられた。かうして、家は最後まで  
無事であつた。

二十一 くものす

二階の窓から見ると、大きなくもが一匹、すうつと、私  
の目の前へぶらさがつて来ました。私は、びつくりしまし  
た。

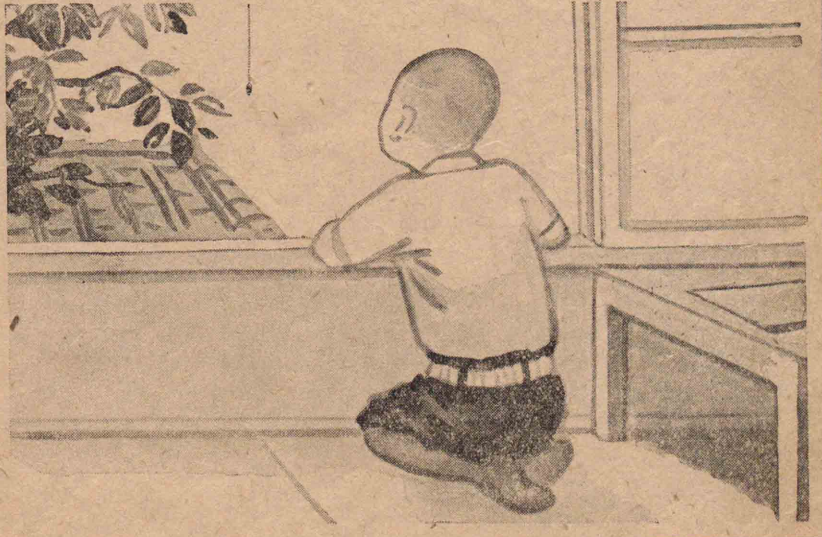


見ると、くもは、雨どひのところから、糸を引  
いておりて来たのです。さうして、そのまま、  
じつとして動かうともしません。これから、  
いつたい、何をしようとするのかと思ふと、私は、急におもし  
ろくなつて来ました。

くもは、やがて後の方の足を動かして、おしりのところか  
ら、たくさんの細い糸を引き出し始めました。糸は、一セン  
チ、二センチと、見るまに延びて、二メートルぐらゐになりま  
した。何十本とも知れない細い、白い糸が、夕風にゆられな  
がら、ふはふはと空中にただよつてゐるのは、ほんたうにき

れいでした。

そのうちに、このたくさんの糸の中の本が、向かふの柿の木の枝にくつつきました。くもには、それがすぐわかるものとみえて、しきりにこの糸を引っぱつたり動かしたりしてあましたが、やがてそれを傳つて、向かふへ渡り始めました。さうして、風にゆられながら、やつと柿の木にたどり着きました。くもは、ほつと一安心したやうで



した。

今度は、前の方の足をしきりに動かして、この糸を自分の方へたぐり始めました。すると、今までたるんであつた糸が、だんだんまつ直になりました。かうして、雨どひと柿の木との間に、一筋の糸が、空中にぴんと張り渡されました。くもはこの上を、いそがしさうに行つたり來たりして、すを作る仕事をつづけました。私は、くものりかうなのに、すつかり感心してしまひました。晩になつて、また行つて見ますと、そこには、もうりつばな網ができてあました。

二十二 夕日

赤い大きな夕日が、今、西の遠い、遠い地平線に落ちて行く  
ところでは、

焼けきつた鐵のやうにまつかです。たらひほどに見える  
大きな圓の中には、何かとろとろと、とけた物が動いてあ  
るやうに見えます。

地上のみどりのあざやかなこと、美しいこと。遠くの木  
立や、家や、煙突が、くつきりと夕空に浮き出してゐます。

日は、ぐんぐんと落ちて行きます。一センチ、二センチと

刻んで行くやうに、動くのがはつきりと見えます。もう、圓  
の下の端は、地平線にかかりました。

ずんずん、沈んで行きます。

圓は、しだいに半圓となりました。櫛くしほどになりました。

あ、どうとうかくれてしまひました。

日が落ちたあとの空は、なんと、いふ美しさでせう。今日  
が沈んだばかりのところから、さし出た、いく百筋のこまか  
い金の矢が、夕空を染めて、空は赤から金に、金からうす青に、  
ぼかしあげたやうです。

あちらこちらに、真綿を引き延したやうな雲が、金色に、く

れなゐに、色づき始めます。

美しい空です。はなやかな空です。

二十三 秋の空

どこまでも

高い空だ。

煙突やアンテナが、

せいのびをしてゐる。

どこまでも

青い空だ。

電柱の碍子がいしが、

くつきりと白い。

どこまでも

さえた空だ。

たたけば、かんかん

音のする空だ。

二十四 濱田彌兵衛

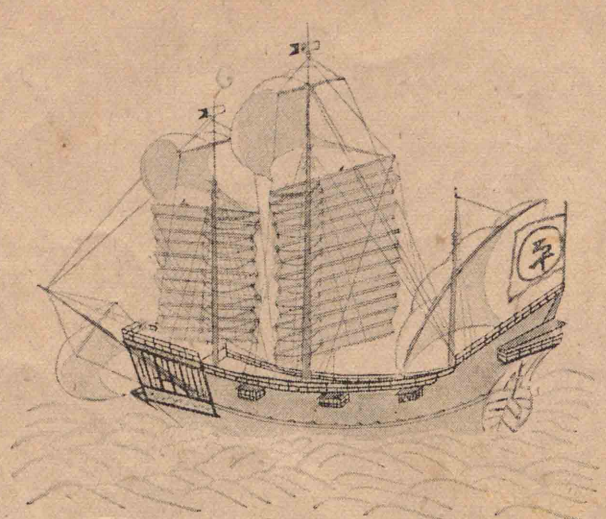
はまた やひやうゑ



末次船すゑつぐねの船長濱田彌兵衛は、臺灣たいわんのオランダの長官ノイツの不法な仕打に、腹が立つて腹が立つて、たまりませんでした。

臺灣は、明治以來日本の領土になりましたが、今から三百年前までは、まだどこの國のものともきまつてあませんでした。今日、高砂族たかさごといつてある島の人々が、未開の生活をしてゐるだけでありました。

その以前から、日本人は、さかんに南方へ船で出かけ、南支那から、今のフィリピンや、佛印ぶついんや、タイや、ジャワス、マトラあたりまで進出して、貿易ぼうえきをしてあました。したがつて、その



途中にある臺灣へも、早くから往來して、そこで島の人や、南支那から來る船と貿易をしたり、そこからさらに南支那へ渡つたりしてあました。臺灣に住んでゐる日本人も、たくさんありました。濱田彌兵衛は、長崎ながさきの貿易商末次平藏へいざうの船の船長として、いつも臺灣から南支那へ通つてあました。

ところで、そのころ、ひよつこりと臺灣へ現れたのが、オラ

ンダ人です。かれらは兵力を以て臺灣の港を占領し、そこに城を築きました。さうして、日本船や支那船が貿易するのをさまたげるために、一割といふ高い關税を拂ふことを命じました。

いはば、新參者のオランダ人が、古參の日本人をじやまあつかひにしたのです。日本人は、なかなか承知しませんでした。そこで、オランダの長官は、たびたび日本船を取り調べたり荷物を没收ぼつしゆしたりして、さんざんいやがらせをしました。

彌兵衛が、末次船ニさうを仕立て、荷物や武器を積んで、臺灣に着いた時、オランダの長官ノイツは、すぐ役人に命じて、その船を調べさせ、一時、彌兵衛を一室にとちこめておいて、武器や船具を没收させてしまひました。彌兵衛が腹を立てたのは、それがためであります。

しかし、彌兵衛は、なにもオランダ人とけんくわをしようといふのではありませんから、できるだけおだやかに出て、武器や船具を返してくれるやうに、たびたびかけ合ひました。ノイツは、

「何のために、武器を積んで来たのか。」  
と彌兵衛を責めます。

「海賊にそなへるためです。」

と、彌兵衛は答へました。そのころ、南支那の海上に海賊の一團があて、彌兵衛も、これまでずあぶん苦しんだことがあります。しかしノイツは、

「もうこのへんに、海賊はゐないはずだ。」

としらばくれて、武器を返さうといひません。

かういふかけ合ひをしてゐる間に、むなしく月日が過ぎて行きました。ノイツは、武器や船具を返さないばかりか、日本船に水さへもくれません。しかも、そのやうすがすこぶるわうへいで、高い椅子いすにふんぞり返りながら、足をもう

一つの椅子の背せにのせたまま、彌兵衛に面會したこともありません。オランダ人の足が、日本人の頭の上にあるといふことが、どれほど彌兵衛たちを怒らせたかわかりません。

彌兵衛は、もうこの上がまんして、日本の恥ちを臺灣台湾にさらしたくありませんでした。何とかして、日本へ歸りたいと思ひました。もし歸れないなら、むしろオランダ人と戦つて、死んだ方がましだとさへ思ひました。

彌兵衛は、部下の者といつしよに、ノイツに最後の面會を求めました。その時、ノイツは城外の別館べつくわんにあましたが、通

譯やくや、そのほか數人の者がそばにゐました。

彌兵衛は、まづおだやかに申し出ました。

「私どもは、日本へ歸らうと思ひますから、ぜひ、出航を許可していただきたくございます。」

ノイツは、だまつてゐました。

「それで、このさい、船具や武器のお引き渡しを願ひたいと思ひます。」

ノイツは、まだ返事をしません。

「風の都合もありますし、どうか今日はぜひとも。」  
するとノイツは、

「歸ることは許さん。」

と、いつものやうにわうへいに答へました。

「どうしても許さないといはれるなら、今日は覺悟がありますぞ。」

と、彌兵衛は、少しつめ寄つていひました。

このやうすを見て、そばにゐたオランダ人たちがびつくりしました。

ノイツも、氣味わるく思つたやうですが、わざと平氣な顔で、

「そんなに歸りたければ、歸れ。」

と吐き出すやうにいつたあとで、

「だが、荷物は全部置いて行くのだぞ。」

とつけ加へました。

彌兵衛は、じつとノイツを見つめました。もう、がまんも何もあつたものではないと思ひました。

「ようし。」

と叫ぶが早いか、すばやくノイツに組みつきました。

彌兵衛は、かた手にノイツの胸ぐらをつかんで引きすゑ、かた手に短刀を抜いて、その胸に突きつけました。

彌兵衛の部下も、刀を抜きました。

その室にあたオランダ人が、

逃げ出して急を知らせました。

たちまち、城内にラツパが鳴

り響きました。オランダ兵士

が、弾をこめた銃を持つてかけ

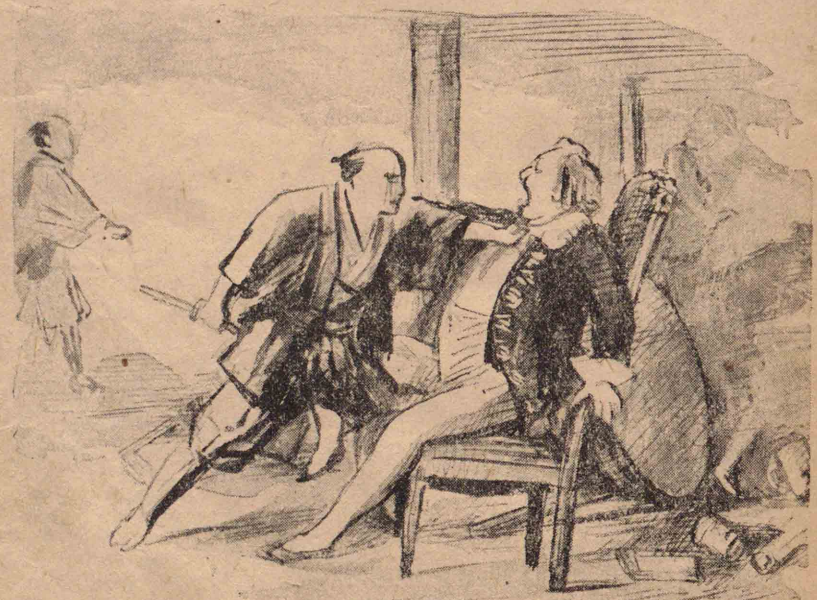
つけて來ました。

「ドドン。」

兵士たちは、屋内へ向かつて撃

ちこみました。

彌兵衛は、ノイツの首に刀を



突きつけたまま

「撃つなら撃て。その代り、長官の命はないぞ。」  
といつて、きつとあたりをにらみました。

「いや、撃つな。撃つなといへ。」

目を白黒させながら、ノイツは、かけつけて来たオランダ人  
にいひました。

兵士は、仕方なく撃つことをやめました。

それから彌兵衛は、ノイツをしばらくあげたまま、長い間  
だんぱんをつづけました。

とうとうノイツは、これまでたびたび没収してゐた荷物  
や、武器・船具、そのほかすべての物を返すことを約束しまし  
た。

数日ののち、彌兵衛を船長とする二さうの日本船は、受け  
取つた荷物をいつぱい積み、おまけにオランダ船一さうを  
引きつれて、堂々と臺灣の港を出航しました。

「ヤヒョーエドノ」といふ名が、そののち、オランダ人の間に  
響き渡りました。

商 (111)	民 (97)	柔 (86)	整 (80)	怒 (64)	坂 (57)	越 (47)	講 (39)	傷 (25)	汝 (17)	潮 (4)
占 (112)	質 (98)	縱 (87)	總 (80)	叫 (64)	汲 (58)	輪 (49)	式 (40)	術 (25)	討 (17)	銀 (4)
稅 (112)	素 (98)	割 (87)	故 (80)	計 (67)	餘 (59)	齒 (50)	歛 (43)	當 (25)	勅 (17)	狩 (6)
具 (113)	對 (99)	直 (88)	報 (80)	變 (68)	幅 (60)	航 (51)	等 (43)	櫻 (30)	失 (17)	調 (7)
責 (113)	老 (99)	完 (88)	告 (80)	刻 (71)	尺 (60)	景 (52)	科 (43)	遺 (31)	絕 (18)	拂 (8)
背 (115)	宅 (100)	愉 (91)	奉 (81)	端 (72)	危 (60)	振 (53)	全 (43)	族 (31)	祈 (19)	標 (10)
恥 (115)	央 (100)	快 (91)	燈 (81)	響 (75)	油 (61)	妙 (54)	現 (45)	配 (33)	任 (19)	廷 (14)
求 (115)	圓 (106)	離 (92)	壁 (82)	煮 (75)	注 (61)	造 (55)	賊 (45)	寢 (33)	特 (19)	從 (14)
可 (116)	法 (110)	柳 (95)	精 (84)	活 (77)	錦 (61)	堤 (56)	圍 (45)	湯 (34)	丈 (20)	祝 (14)
吐 (118)	領 (110)	暮 (96)	養 (84)	拭 (77)	伐 (62)	市 (56)	覺 (45)	照 (36)	震 (23)	座 (15)
約 (121)	未 (110)	災 (97)	管 (85)	練 (78)	探 (62)	街 (56)	悟 (45)	泥 (37)	麻 (23)	奧 (15)
	往 (111)	垣 (97)	末 (86)	敬 (78)	筋 (64)	附 (57)	低 (47)	耕 (37)	固 (24)	給 (16)

昭和十七年二月十七日  
文部省検査日

昭和十七年二月十六日  
昭和十七年二月十六日  
昭和十七年二月十六日

著作權所有

著作發行

文

部

省



印刷所

文

部

省

發行所

東京書籍株式會社

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
東京書籍株式會社工場

翻刻發行  
兼印刷者

東京市王子區堀船町一丁目八百五十七番地  
東京書籍株式會社

代表者 井上源之丞

初等科國語 三  
定價金拾九錢

初四

赤城良子